

---

# 消える事のない傷・・・

桜井葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

消える事のない傷・・・

### 【Nコード】

N7734F

### 【作者名】

桜井葵

### 【あらすじ】

私、美咲葵<sup>みこきあおい</sup>は大切な貴方を傷つけてしまった。あの時、あの一瞬で私の未来は暗闇へと変わってしまった。もしも、もしも許してくれるのなら・・・。

## ブローグ

### ブローグ

私には、一生消ない傷がある。私は、大切な貴方を傷つけてしまった。そして、自分も……。これから私は、この消えることのない傷を背負って生きていかなければならない。けれど、私はこの傷の深さだけ貴方に愛されていた気がしてしまう。自分で自分が嫌になる。しかしそう思ったから、少しは救われたのかもしれない……。

## プロローグ（後書き）

どうでしたか？2作目です。といっても、1作目も完結していないのですが……。今回は違うタイプに挑戦してしまいました。

## 第一話

昔から地味だった私と、昔から派手だった彼。私達の家は隣同士だった。そのせいもあって、昔は毎日のように遊んでいた。小学校の6年間ずっと同じクラスだったというのも奇跡だと思う。私達は中学受験をした。私は受かって、彼は落ちてしまったけれど。それで中学校は別々になった訳だけど……。今年、4月。突然彼は、私と同じ私立の高校を受験していたことを話した。正直少しうれしかった。なので、私達はまた同じ学校に通える事になった。

今日は、入学式の日。ちょうど桜が満開だし、雲ひとつない快空だった。とても良い入学式になりそうだ。

「おはよう、葵。」（?）

「おはよう、千紘。」（葵）

いつ見ても派手な彼。

少し長めの茶色い髪に、凜とした顔立ち、整った唇、男にしては大きい目。

誰が見ても美男と言うだろう。私はその顔にいつも見とれてしまう。彼の制服の着こなしは、さすがに派手で見えているだけで目がシュパシュパする。

それに比べて私は、地味すぎる。

よく小学校の頃男子にいじめられていた。ずっと、「地味！地味！」と言われてきた。

しかし、彼だけは私を地味と呼ばなかった。

そんな事を考えている間に会場についていた。そこには、クラス発表の紙が掲示されていた。

全部で5組。私の名前は1組の欄にあった。中学校のとき仲が良かった柚羽華も一緒だ。

どうやら、千紘は違うクラスのようだ。

「今年も同じクラスだね!!」(?)

この子が柚羽華。中学校で出会って、高校も同じ。

「よろしく。」(葵)

私は、いつもより明るい声で言った。

教室に行くと、新しい教室。新しい机や椅子。新しいクラスメイト。いろいろなものがとても新鮮に感じた。そうしている間に、担任の先生が入ってきた。その瞬間がっかりした。男の先生だったのだ。がつくりしたもの、良く考えてみれば高校にもなると、教科によつて先生が違うから、担任が誰だろうと関係ない。どっちにする、学校なんて好きではないからいいけど・・・。

### 放課後

長い授業が終わった。とつとと帰ろうと思って支度をしていると、後ろからとても元気な声が飛んできた。驚いて振り向いてみると、千紘がバックを片手に提げて、もうひとつの手でピースをしている。千紘の優しい笑顔にまたもや見とれてしまった。

1部の女子が大騒ぎをしている。

私達1組は、私立中学から来た人が集まっている。(みたいだ。)だから、誰一人千紘を知っている人がいない。私を除いて。

「どうかした?」(葵)

やつとの思いで、出た声は少し低めだった。

「怒るなよ!」(千紘)

よく私は、怒っていないのに怒ってる?と聞かれる。いつもより低めの声で話すと怒っていると思うらしい。ヒドイ話だけれど・・・。

「別に怒ってないけど?」(葵)

さつきより少し高い声で言った。

「一緒に帰らない?」(千紘)

私は、千紘のとても意外な発言に驚きを隠せなかった。

「うん。」(葵)

とっさに「うん」といつてしまったが、千紘と帰ると地味なのが余計に目立つ。恥ずかしいなと思いながら、私達はゆっくり歩き出した。

## 第二話

「じゃあな。」（千紘）

「うん、ばいばい。」（葵）

そういうと、私達は別々の家へと入っていった。

私の家族は、私、美咲、葵と母の美咲、由美、父の美咲、一磨、弟の美咲、俊壱の4人家族。弟の俊壱は姉ながら格好いいと思う。まだ中学1年生なのに、今の彼女は3人目と、とてももてている。家族と軽い挨拶を交わすと、私は自分の部屋へと向かった。2階には4部屋ある。一番南の部屋が私の部屋。ついでにその隣が俊壱の部屋だ。

そのころ千紘はというと、自分の部屋でお気に入りの音楽を聴いていた。

俺の部屋は、葵と同じ南にある。しかし、兄貴の悠哉はすでに独立をしていて不在だ。つまり、2階の部屋は、俺が占領できるという事だ。

一番北の部屋、イコール葵の部屋に一番近い部屋は勉強専用なのだ。これで、分からない宿題は解いてもらえる。俺についているよな。

気がついたらもう朝になっていた。いつの間にか寝ていたようだ。眠い目をこすりながら、とろとろと制服に着替えて、軽い朝食を済ませると家を出た。今日もとてもいい天気だった。少し早めに学校に着いてしまった。暇つぶしに携帯を開くと、ちょうど千紘からメールがきた。

今どこ？と千紘。

学校だけど？と私。

は？待ってるよ！と千紘。



なんで？と私。

キヤー

廊下で女子が騒ぎ出した。心の中でうるさいと思いながらの、気になってしまい窓を開けた。

すると、両サイドに女子が頬を桃色に染めて叫んでいる。

その間を汗をかきながら小走りでこっちへ向かってくる男がいる。千紘だ。

1日でこの人気とは、さすがだよ、千紘。私とは住む世界が違う気がした。

私は、そのまま席にもたれかかった。

「明日は待つてろよ。」（千紘）

横の窓から声が聞こえてきた。ふと見ると、千尋がニヤニヤしながら私を見ていた。

おそらく朝の事だろう。周りにいた女子達が不思議そうに見ていた。

「うん。」（葵）

私は少しうれしかった。アイドルと知り合いだったときにたいな気分だった。

しばらくして千紘はじゃあなと言い、自分の教室へと向かっていった。その足取りはなんとなく軽そうに思えた。

それを見ていると、肩をポンと叩かれ、後ろを向くと一人の女の子が私を見ていた。きれいな笑顔。しかし、その中に少し冷たさを感じた。

「ずいぶん仲がいいんだね、工藤さんと、うらやまし〜。」（柚羽華）

工藤？一瞬誰だかわからなくなったが、私の中である1人の顔が浮かびあがってきた。

工藤 千紘。私の幼馴染だ。

「まあ、幼馴染だけだね。」（葵）

といってもあんな美男子の千紘とこんな地味女の私が幼馴染なんて想像つかないだろうが。

「ふん。」（柚羽華）

さすがに皆うらやましいらしく柚羽華だけでなくクラスのほとんどの女子から聞かれた。30人近くなるとイライラしてしまった。そのおかげで今日は朝だけで疲れてしまった。

今日の午前中の授業は、作文や自習が多く授業という授業はしていない。そのせいか、あつという間に昼食の時間になっていた。

私の高校はとても大規模で、大きい校舎が2つ。

小さい校舎が3つある。

全校舎とてもきれいで過ごしやすい。

私は普段生徒が行くことのない小さな校舎のひとつ、夢館の屋上に向かっていた。

今日は疲れていて一人でゆっくりとしたい気分だったのだ。屋上につながっているドアノブに手を掛け、目をつむり、勢い良くドアを引いた。

心地よい風が私に向かって吹いている。

屋上のちょうど真ん中に行き、風のリズムに合わせて、空を見上げるようにして寝転んだ。

とてもきれいな青空。

真っ白い雲がゆっくり、ゆっくりと流れていく。

風のちよつとしたいはずらでボサボサになってしまった髪を手ですいた。

学校では初めて結んでいた髪をとった。ここは私だけの世界。

私はこの場所がだんだん大好きになっていくのをしかと感じてい

た。

### 第三話

ガチャ

ドアが開く音がした。私は、ドアの入り口に体を向けた。肩より5cmぐらい短いとてもきれいな黒髪。その黒髪が風になびいている。

身長は170cm前後だろう。距離が遠くてよくわからない。目は真つ黒で鋭く、鼻も高い。周りの人から見れば「美男子」だというだろう。

しかし私は、怖いという印象しか持つ事ができなかった。

俺の秘密の場所になぜ女の人がいるのか。

黒の強い茶色い髪はとても日本人らしい。

目は大きく見開いていて、くりくりとしている。

薄い紅色の唇は、彼女の顔にあってとても女の子らしい。

俺は全クラスの名前と顔をインプットしている。それなのに、彼女は誰だかわからない。転校生なのだろうか。

いつの間にか私達の目と目は合っていた。彼の鋭い目と私の目。

彼の目は、私の心の中まで入ってきそうで恐ろしい。

彼がゆっくりと私の方へ歩み寄ってくる。その間も私達は目を離さなかった。彼の迫力に一步も動く事ができない。彼は私の目の前で止まった。

「名前とクラス教えてくれる？」（?）

彼は少し笑みを浮かべ優しく聞いた。あんな目つきをしているのに、声は柔らかく、優しくかった。

「1年1組、美咲・・・葵です。」（葵）

彼はなぜ、私に名前を聞いたのだろう。だんだん彼の顔が曇っていくのを、私は無言で見ていた。

おかしい、1年1組って同じ私立中学なのに・・・なぜ俺は彼女を知らないのだ？

彼は私の横に座り込み、下を向いている。

「どうかしましたか？」（葵）

私は彼の顔を覗き込むようにしていった。そうすると、彼は優しく微笑んだ。目は変わらないのに、笑っているときはなんとなく表情がやわらかい。

「俺、全クラスの名前と顔をインプットしているのだけど・・・君とは中学も同じはずだが分からないのだよ。」（？）

全クラスの名前と顔をインプットしているって、かなりすごい。全部で8クラスぐらいあって各クラス30人はいる。つまり、合計で240人以上の人をインプットしているなんて・・・彼の記憶力はそうとうなものだ。それより、私が髪を結んでいないだけで分からないものか。

私は、手で髪を2つに分けて持った。

「これでわかるかな？」（葵）

私は千紘にさえも見せたことのない笑顔を見せた。できるだけ心配させないように。

彼女は・・・、これでやっとわかった。しかし、髪だけでこんなにも印象が違うとは驚きだ。なにより、写真の彼女と今の彼女では目が違う。写真の目は、とてもくすんでいた。しかし、今の彼女の目はとても透き通っていて、美しい。

「やっと分かったよ、写真とずいぶん印象が違うんだね。今は、すごくきれいだよ。」（？）

お世辞だと分かっている、男の子にほめられたのは初めてだから、うれしい。

彼とは気が合い、昼休みいっぱいまで話してしまった。見た目と違って優しかった。

キンコンカンコン

授業終わりのチャイムが鳴り、私は帰る用意を始めた。

## 第四話

夕日が沈み、まん丸の月が顔を出した。  
その頃私の頭の中は、昼間に戻っていた。

昼間に会っていた彼は誰なのだろう。彼がどんな人なのかほとんど分からない。

たったひとつ分かっている事は、

彼が私と同じ中学校の卒業生だという事。

彼はいつたい誰なのだろう。名前はなんというのか、なぜ授業を受けていないのだろうか。彼へに対する疑問は山ほどあった。  
彼を知っているような男友達はい・・・た！！千紘なら知っている気がする。

私はとっさの思いつきで千紘に電話を掛けた。

もしもし？と私、

ん？と千紘、

私と同じ中学で、授業に出てない人ってわかる？と私、  
は？誰？と千紘、  
脈なしか・・・。

あー！！わかったわかった。と千紘、  
誰？と私、

『萩原 翼』だよ。と千紘・・・。

昼間の彼は・・・『萩原 翼』。

『萩原 翼』とは、

とてもお金持ちの家のお坊ちゃまで、

性格はとてもきつく、

今まで授業に出た回数はたったの「2回」、

ひとつだけいいのは、顔だけ。

というのでうわさの男だった。

そんな人と私は楽しく話していたなんて・・・。

けれど、

とてもお金持ちの家のお坊ちゃまと、いう感じはした。

性格はとてもきつく、というのは感じなかったけど、

今まで授業に出た回数はたったの「2回」、分かるな

ひとつだけいいのは、顔だけ。  
ノコメント・・・。

温かい日差しが私を包み込む。朝日が昇るのと同時に私は目覚めた。

今日こそは彼に真実を聞くぞ！と意気込んでいた私は、

お昼休みのチャイムが聞こえるなり、教室を飛び出した。

夢館の屋上。

私は、屋上へ続く階段を一気に駆け上がり、ドアの前で止まると深呼吸をした。

2つに結んでいた髪をおろし、軽くすいた後ドアノブを強く握り、思いつきり引いた。

私は、昨日より少し温かみのある風を受け、



昨日と同じ場所へ座っている彼のもとへ近づいた。

「一日ぶり」(?)

彼は、優しい笑顔を私にむけた。

「ひとつ聞いていい？」(葵)

少し深刻そうな顔で聞いた。

「うん、何？」(?)

彼は、優しい笑顔を变えずに……。

「あなたって、萩原さんなの？」(葵)

さつきまで、見せていた笑顔が一瞬曇ったことを私は見逃さなかった。

「そうだよ。」(翼)

やっぱり、彼は『萩原 翼』なのだ。

少しほっとした私は、ようやく笑顔を見せた。

「引いた？」(翼)

彼は切なそうな顔で聞いた。

「なんで？萩原さんは萩原さんじゃん！」(葵)

といい、笑うと彼も笑った。

こんなに優しい彼が、性格きついといわれるなんて……可哀そう。

「翼……、翼って呼んでよ！俺も葵って呼ぶからさ」(翼)

彼はそういうと、優しい笑顔を私に向けた。

「うん……、翼！」(葵)

2人は声を合わせて笑った。

私達は、ある約束を交わした。

1・翼は授業に出る事。

2・葵は俺と一緒にいること。

彼が授業に出なかった原因のひとつは、クラスメイトがなんだか嫌な人だったから。だそうだ。だから、私が一緒にいれば彼は授業に出るといつてくれた。

彼が孤独な気持ちは、私が一番わかる。同じく孤独だった過去があるから。

だから、私は約束したんだよ。

## 第五話

ふと目を開けると、7時すぎにもかかわらず外は真つ暗だった。そのせいか、周りの風景全てがぼやけている。

学校に着くと、男女ともに騒いでいる。異常な騒ぎに不審に思いながらも、自分のペースでゆつくりと歩いていった。

「なんで急に？」とか、「イケメンよね。」とかいろいろな会話が聞こえてきた。全然気にしなかった。あの一言以外は。

校舎に入り、階段を上っていた。

『なんで、萩原翼が？』

この一言が私のゆつくりとしたペースを崩した。翼が授業に出ようとしている！約束を守ってくれた！そう思うと無意識に歩幅が大きく、速くなっていた。

「翼！」（葵）

私は声を張り上げた。翼に届くように……。

「おっす、葵！」（翼）

彼も声を張り上げた。そして、彼はいつもの優しい笑顔を見せた。急に胸が苦しくなり、体中熱を持った。私はそれを大声出したからだと思った。いや、思い込んだ。気がつけば、周りの視線は私と翼に向けられていた。私は恥ずかしくなり、一步後ろに下がった。そしてもう一步。そして、自分の席にもたれかかった。

その頃クラスの女子は、

「やだわ〜美咲さん、工藤君と仲がいいと思ったら、萩原君ともむかつく。」

「本当〜。」

そんな会話が交わされていた。しかし私は、それに気づかず激しい動揺に襲われていた。それがなんなのか、今の私は知らなかった。

「ちょっと美咲さん来てくれる？」

ある女子軍団に呼ばれた。しょうがなくついていった。

彼女達は、誰も使う事のない校舎のトイレで止まると、私の背中を押した。

「ム力つくのよ！あんたみたいなブスが工藤君や萩原君と仲良くして。」

（女の嫉妬って言うやつ？）

そう言った後、走って消えた。いくらドアを押しても引いてもびくともしない。外から鍵を閉めたみたい。内心彼女達に腹を立てていた。しかしそれどころではない。ここから抜け出す方法を考えないと。

考えに考えた末、方法が2つ見つかった。

- 1 . 助けが来るまで待機
- 2 . 窓から飛び降りる

誰もこないトイレなんかは助けが来る事なんてそうはないだろう。そうなると答えは一つ。窓から飛び降りるってこと。しかしここは3階。飛び降りたらケガをするだろう。いや、ケガだけではすまないだろう。

でもやるしかない！私は決意し、窓から飛び降りた。

「キャ                      ！！」

ドンッ！

鈍い音とともに私は目を閉じた。

はっとして目を開けると見覚えのある部屋で寝ていた。

全身汗でびっしょりだった。とくに頭はベタベタしており気持ち悪い。

時計が6時を示している。すこしの間途方にくれていた。そして、さっきのは夢だったことに気づいた。

かいた汗を流すためにシャワーを浴びた。

（シャワーで洗い流したから、身も心も綺麗・・・ってヤバイ！学校だった！）

学校だった事を思い出した私は、制服に着替えて、パンを口にくわえて

家を出た。

校門まで行くと、門が閉まっていた。これじゃ完全に遅刻だ。鍵がかかっていたし、私は裏門から入る事にした。

（・・・）

下駄箱で私の足は止まった。

誰1人の靴がない。よく考えてみれば今日は土曜日。学校は休みの日だった。

しょうがないから帰ることにした。

冷たい北風が私の背中を押すのを、1人淋しく感じていた。

## 第六話

重い足を引きずりながらやつとの思いで家にたどり着いた。家中は静まり返っている事から、みんな出かけたことがわかる。

「ただいま。」

誰もいない家に自分の帰りを告げた。

部屋に入ると、制服を脱ぎ、普段着に着替えた。白いワンピースに黒っぽいカーディガンをはおり、2つに結んだ髪もほどこいた。お気に入りのクッションに座り、テレビのリモコンを探した。

ドンドン

いきなり窓が音を出した。はずもなく、ベランダに千紘が立っていた。

黒のタンクトップの上にチェック柄のシャツをはおり、デニムパンツを穿いている。千紘の引き締まった体にとってもあっている。私はまたもや千紘に見とれた。

彼は、鍵を指差している。

きつと開けるという意味だろう。仕方なく鍵を開けた。千紘はテレビのスイッチを入れると私のお気に入りのクッションに座った。私は彼の前に座った。

いつもの彼の笑顔がどことなく寂しげで胸を痛めた。

私達は無言だった。

私の部屋はテレビの音だけが響いていた。

「どっか行かね？」

彼が先に話を繰り出した。

「なんで急に？」

疑問文を疑問文で返した。

「なんとなく。」

意外！てつきり買いたいものがあるから。とか、ファンの子からのプレゼントのお返し選んでとかかと思っただのに・・・。

「なんとなくて・・・。」

（バーカ、お前と2人で出かけたいなんて言えるかよ！）

「うん、いいよ。」

暇だったし、まあ良いかと思っただ。

「おいし。」

今、私はとても幸せ。なんていっても、今私はケーキがおいしいお店で温かい紅茶を飲んでいた。ここのお店が一番のおススメは、モンブラン。とっても濃厚なクリームにほろ苦いコーヒー味のスポンジ。頬つぺたが落ちてしまいそうになった。

「お前、いつもそういう顔してればいいのに。」

いつもの爽やかな笑顔に一瞬ドキツとした。

「なつなにそれ！」

「お前、いつもブスーとしてるからよ。」

どうせ私は千紘と違って顔も性格もブスですよ！！

『紅茶のおかわりはいかがですか？』

「はい！貰います。」

千紘が笑っている。私の大好きな笑顔。

春の暖かい日差しが私達を優しく照らしていた。

あの後、私達は特にすることなく帰ってきた。仕方なく出かけたにしては楽しかった。おいしいケーキは食べられたし、温かい紅茶も飲む事ができし。

「じゃあな。」

「うん。」

そついい、私達は家に入ってしまった。

昨日、夢館の屋上で「萩原翼」と「葵」が楽しそうに話しているのを見かけた。葵があんなに楽しそうに話しているのをいつ見ただろう。

そう思うとなんだか悔しくて仕方なかった。正直葵が俺以外の男と楽しそうにするのを見たことがない。そう思うともっともっと悔しかった。

今まで彼女を意識する事がなかった。だって、彼女はずっと俺以外の男と仲良くした事がなかったから。けれど今は違う。

それでなんだかヤバイと思い、彼女をデートに誘った訳だ。彼女はデートだとは思っていないだろうが……。けれど、それでもいい。あんなに楽しそうな顔をしていたから。というより、おいしそうな顔をしていた。彼女がケーキを好きだった事はよく知っている。だからこそあの店に行ったのだけだ。

しかし、俺は葵が好きなのだろうか。



## 第七話

「おつす。」

「おはよ。」

今日こそ学校。間違つてない！この間は間違つたからなあ。

「この間は楽しかったよ。」

楽しかったというより、ケーキが美味しかった。と言って方がよい。

「今日、騒がしいな。」

「そだね。」

そういえば騒がしい。こんな事前にもあつた気がするような・・・。

またもや我がクラス、1組に人だかりが！！

「ど、どうかした？」

恐る恐る柚羽香に聞いた。

「どうか、してるよ！萩原様が登校してきてくれるなんて！！」

柚羽香はかなり興奮している様子。

「つ、萩原？」

翼といつてしまいそうだった。

「は？あなた、萩原様を知らないの？！お金持ちのお坊ちゃまで性格きついけど、めちゃくちやかっこいい王・子・様」

知ってるよ。

翼は私との約束を守ってくれた。そう思うと自然と笑みがもれた。

「・・・。」

千紘はとても複雑な思いを抱いていた。

なんで、今頃登校してんだよ！  
なんで、葵は笑顔なんだよ！

『葵が奪われる。』

頭の中でそんな言葉がよぎってしまった。

『絶対にわたさない。』

千紘はそう思っていた。

「葵、おはよ。」

翼が私に気がついて、優しい笑顔で声を掛けてきた。

「おはよ。」

私も笑顔で返した。

それを千紘が見ていたなんて知らずに。

「葵、お弁当一緒に食べよう!!」

「うん!」

私達は夢館に向かった。

「美味しかった」

「そうだな!」

人ってなんで、美味しいものを食べていると幸せに慣れるんだろう。  
う。

「お前って、おいしそうに食べるよなあ。」

翼は冷やかしの目をしながら笑っていた。

「そ、そんなことないよお／＼」

「そんなこと、あるよ!」

私はこんな毎日がずっと続くといいと思っていた。

永遠に  
・  
・  
・  
。

## 第七話（後書き）

更新が遅れてしまいました！  
すみませんでした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7734f/>

---

消える事のない傷・・・

2010年10月28日06時42分発行